

氏 名 飯國 有佳子

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1016 号

学位授与の日付 平成 19 年 3 月 23 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻  
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的  
研究

論文審査委員	主 査 助教授	宇田川 妙子
	教授	竹沢 尚一郎
	教授	田村 克己
	教授	土佐 桂子(東京外国語大学)

## 論文内容の要旨

本研究は、上ビルマ村落において展開される宗教的実践を、ジェンダーの視点から民族誌として記述し、ビルマの宗教研究を再考することを目的とする。具体的には、先行研究において、研究対象として十分に取り上げられてこなかった女性に焦点をあて、その宗教的実践を明らかにすることで、従来、ビルマ宗教研究において広く流布してきた仏教／精霊信仰という二元論を問い直すことを目的とする。

まず第1章では、先行研究を概観し、問題の所在を明らかにする。東南アジア大陸部の上座仏教社会に関する宗教研究の多くは、仏教／精霊信仰、男性／女性といった二元論的枠組みを用い、しばしば男性は仏教に、女性は精霊信仰にかかわるといった単純な図式で、当該社会の宗教的現実を説明してきた。これに対し本論文では、当該社会の人々の宗教観を、個々の実践に着目しながら問う必要があることを指摘し、そのために、女性の宗教的実践の視点を導入する必要性を述べる。なぜなら、女性の宗教的実践は、諸々の二元論的枠組みの中で、研究対象として幾重にも周辺化されてきたため、女性への着目は新たな視点をもたらすものと考えられるからである。この仏教中心主義的な二元論的図式の影響力は大きく、宗教研究のみならず、ジェンダー研究にも及んでいる。そこで、2節3項では、上座仏教社会におけるジェンダー研究を概観することによって、二元論に基づく仏教決定論をできるだけ排した議論を展開するための視座を模索するとともに、2節4項では、一般の女性の宗教的実践に着目した数少ない研究を取り上げることで、論点をより明確にする。

このように宗教研究における二元論の再考を目的とした本論文は、具体的には、上ビルマの一村荘における女性たちの宗教的実践に着目するものである。このため、その調査村の歴史的背景、地理的位置づけなどの概況を示し、続いて、政治、経済、世帯における諸活動を、ジェンダーの視点から明らかにする。さらに、次章以下で扱う諸儀礼の位置づけを明らかにするために、調査村における宗教的側面の様態について概観する。

上記のように、これまで男性は仏教、女性は精霊信仰にかかわるといった図式の流布によって、女性の仏教徒としての側面は、十分に議論されてこなかった。そこで、3章ではまず仏教の側面における女性の宗教的実践を見ることで、女性が仏教徒としての確固たる認識を持ちながら、仏教にかかわる様々な宗教的実践を行っていることを明らかにする。まず、実践局面に目を向ける前に、仏教経典における女性に関する表象をみることで、経典に基づく仏教イデオロギーが、男性中心主義的なジェンダー観を有することを示す。そして、経典から派生した女性性の不浄視、危険視は、宗教的空間のみならず、家屋等の日常的に使用する空間においても適用されていることから、社会的にも再生産され、規範となっていることを示す。次に、女性たちの宗教的実践を見ていくと、彼女たちは、儀礼か日常か、世帯レベルか村落レベルか、いかなる年齢や婚姻条件にあるかなどを問わず、皆何らかのかたちで、仏教にかかわる宗教的実践を行っていることが浮かび上がる。そして女性たちは儀礼への参加などの実践を通して、仏教徒であるという確固たる認識を獲得していることも明らかになってくるが、このことは同時に彼女達が男性中心主義的な仏教イデオロギーを内面化していることも意味している。

一方、既存の研究において、女性は精霊信仰にかかわるものとされてきたが、第4章で

は、精霊祭祀の実施をめぐる繰り広げられる人々の実践や語りに着目することによって、その図式を再考する。1 節では、世帯レベルでの精霊祭祀は、女性が行うものとされているにもかかわらず、男性が関わる場合もあることを明らかにする。次に、精霊祭祀を行うことに対する人々の語りの事例を示すことで、男性と女性とでは、精霊に対する見方や、精霊へのかかわり方が異なることを指摘しながら、女性が精霊祭祀に関わる理由は、仏教的力がないために、男性以上に祭祀にかかわらざるを得ないと彼女達自身が考えていることを指摘する。しかし、同時に彼女達は、仏教徒であるという認識を持つため、祭祀を「敬意を示す」と読み替えることで、精霊祭祀に対して、男性とは異なる見方を有していることも明らかにした。つまり、本来精霊祭祀の実施は、それ自体ジェンダーとは直接かわからないものであるが、規範レベルにおいて男性中心主義的な仏教イデオロギーが存在するために、祭祀の実施がジェンダーの問題へと帰されていること、そして、それゆえに精霊に対する見方には、行為主体のジェンダーによって若干ながら差が認められることがわかった。

これまで、女性の視点を入れることで、単純な二項対立的図式では捉えられない現実のあり方を示してきた。しかし、女性も男性中心主義的な仏教イデオロギーを内面化しているため、精霊祭祀にはやはり女性が多に関わることが多く、男性の関与はほとんど見られない。そのため、このままでは従来の二元論に関する議論を若干修正したに過ぎない。そこで、第5章では、雨乞い儀礼の実施をめぐる起こった事件を取り上げることで、仏教と精霊信仰が、彼ら自身によってどう解釈され、いかなる現象として立ち表れてきたのかをみていく。この事例は、本来の主催者ではない女性たちが、精霊祭祀による雨乞いを提唱したところ、村長ら男性はそれを黙認する一方で、僧侶による雨乞い儀礼を、精霊祭祀に先行して同じ日に開催することを急遽決定したというものである。この2つの雨乞い儀礼の実施過程において見られた、人々の具体的なやり取りを分析していくと、仏教／精霊信仰、男性／女性という二項対立的図式を単純に組み合わせた構図は、村内のさまざまな権力関係が交錯する中で利用され、その図式がさらに強化されるかたちで再生産されたものであることが明らかになる。

最後に、結論として以下を提示したい。これまでの研究では、女性の宗教的实践は、精霊信仰との関連において捉えられ、仏教的な側面はあまり重要視されてこなかった。しかし本論文の記述からは、女性は仏教徒であるという明確な認識を持ちながら、仏教にかかわる宗教的实践と精霊祭祀の双方を行っていることがわかった。また、仏教との対立において捉えられてきた精霊信仰を見ると、男性中心主義的な仏教イデオロギーが社会的規範となっているために、行為主体のジェンダーに基づく差異が生じ、その結果、本来ジェンダーとはかわからない精霊信仰が、ジェンダーの問題へと還元されてきた。こうしてみると、彼らの宗教的な現実とは、従来の単純な図式に当てはまらないことは明らかだろう。

ただし、二元論自体を完全に否定することもできない。実はこの二元論的図式が、彼ら自身によって宗教以外の権力関係のなかで利用され、強化されてきたことを、第5章で示した。このように、仏教／精霊信仰という二元論的図式は、ジェンダーの視点をいれることによって再考されるべき課題であることが明らかとなるため、今後は行為主体のジェンダーに留意した研究を進めると共に、この図式を単に宗教の問題としてのみ捉えるのではなく、生活全体の中に位置づけることによって、相対化していく必要があると考えられる。

## 論文の審査結果の要旨

本論文は、上ビルマ村落における宗教的実践を民族誌的に記述するとともに、ビルマの宗教研究、とくに仏教と精霊信仰の二元論を、ジェンダーの視点から再考することを目的としている。

第1章ではビルマの宗教にかんする先行研究を概観し、従来、研究者側に仏教中心主義、男性中心主義が根深く存在し、それらが複雑に関連し重層化しながら二元論を作り上げてきたことを明らかにした。仏教／精霊信仰が男性／女性という対立と結び付けられて論じられてきたのは、このためである。ゆえにその批判的検討には、特にこれまで看過されがちだった女性たちの宗教実践を、従来のようにテキストや規範レベルだけに還元することなく、実態に即して詳細に分析していくことが、有効であり必要でもあった。

したがって以降は、第2章で概観した上ビルマの一村落における調査資料をもとに考察を進めた。まず第3章では、女性たちの仏教にかかわる様々な宗教実践や仏教徒としての意識について、具体的に明らかにした。従来の研究では、女性たちの仏教徒としての側面については十分に触れられてこなかったが、村落社会全体にとっても、女性たちの自意識にとっても、女性の仏教的な宗教実践は重要な意味を持っている。第4章では、一方の精霊信仰にかんしても、それが実際には男女にかかわりなく信仰されていることを明らかにした。たしかに精霊祭祀は女性たちが行う傾向にあるが、それは精霊信仰そのものがジェンダー化されているからではなく、女性たちが熱心な仏教徒であるがゆえにその男性中心主義性を内面化しているためであり、したがってここからは、従来のあまりにも単純な二元論の問題点が顕わになった。

こうしてみると、この二元論は研究者側の「捏造」に過ぎないといえるかもしれない。しかし現地の人々自身もそれを利用し再生産していることを、第5章で、調査村落で起きた雨乞い儀礼にまつわる事件を詳細に分析しながら指摘した。つまり、人々の宗教実践の現場、特にこれまで見過ごされてきた女性のそれに注目すると、これまでの章で見たように仏教／精霊信仰の二元論の問題性が明らかになってくるが、その一方で、彼ら自身が男性も女性も、それを自らの宗教や社会を説明し行動する際のいわば参照基準の一つとして用いているのである。ゆえに今後は、この図式の政治性や文脈性にかんする詳細な研究を続けていくことによって、二元論をさらに相対化していくことが必要であろうという展望とともに論を終えている。

さてビルマ（現国名ミャンマー）では、従来から、村落の調査は非常に困難なものであった。とりわけオーソドックスな村落の民族誌は1990年代以降ほとんど出ておらず、その意味で、本論文は貴重な研究成果といえる。個々の記述もわかりやすく詳細で、丁寧な調査を行ったことが伺える。特に女性の生活や宗教活動にかんしては、今後のビルマ研究にとって基本的な資料として位置づけられるに違いない。たとえば第2章の早乙女組などの共同労働組織の実態の記述や、女性たちが村落内で一定の社会的・宗教的役割を果たしているという指摘はきわめて興味深いが、仏教儀礼や精霊信仰にまつわる年中行事に関する資料は、宗教人類学において重要な貢献をなすと思われる。そして以降の各章での指摘、すなわち、女性たちの仏教徒としての側面、精霊信仰は本来ジェンダーとは関連しないという指摘は、いずれも詳細かつ説得的な民族誌的資料に裏付けされており、今後のビルマ

宗教研究にとって重要な見解の一つとなると期待される。特に5章での、二元論は彼ら自身の論理でもあるという指摘は、重要である。

その反面、従来の仏教＝男性、精霊信仰＝女性の宗教という二元論を批判的に乗り越えようとするあまり、結果としてこの図式を再生産してしまっているかのような印象も与えかねない。女性と男性の記述に関しても、議論の前提として、両者をあまりにも排他的に二元化してしまっているきらいがある。このため個々の儀礼や宗教実践の分析にも不十分な点が散見された。それは一つには、本論文が前提としている二元論の議論自体が、主に1980年代の構造分析的な議論であるということによる。ただし90年代以降は、そうした構造分析だけでは捉えられない仏教のイデオロギー性や権力関係のなかの社会分析など、あらたな研究課題が出てきており、本論文でも最終的には、二元論の文脈性、政治性、社会背景に関する議論へと発展する可能性が見て取れるため、今後の課題として期待したい。

したがって本論文は、その分析や理論展開等にいくつか問題を残しているものの、全体としては、人々の個別の宗教実践への着目、価値の内面化、規範レベルと実践レベルの区別という視点のもとで、具体的かつ緻密な記述と考察を重ねている点は評価され、博士論文として妥当であると判断した。